

## 社会科学のパラダイム転換の必要性(1)

——モダニズムの「ニュートン型社会科学」より、

「ポスト・アインシュタイン」のホリスティックな社会科学への転換を

小林 彌 六

Transition from Newtonian Social Science to Post-Einstein Holistic Social  
Science —— Necessity of Paradigm Change of Modern Social Science

Yaroku KOBAYASHI

はじめに

### 〔1〕 近代社会科学の貢献と失敗

ここで社会科学とは経済学をはじめ、社会学・政治学・法学・歴史学・人類学などの、社会・人間に係わる事象を考究する学問・思想のジャンルを念頭に置く。近代の社会科学はこれらの領域で知識や情報・思考のパターンを蓄積し、整理して大きな成果をあげた。また、経済政治・社会・文化などの諸方面で様々な貢献をしてきた。人類の思考の回路や価値観の形成にも、当然ながら強い影響力を発揮してきた。

これらの大半はモダニズムの社会科学ないしは社会・文化に関わる学ということができよう。この機会にあえて強調させていただきたく思うのは、これらの現代の社会科学の本質が「疎外された社会科学」で、解体・革新・再生の努力が必要ではないかということである。その情報量の巨大さにもかかわらず、これまでのモダニズムの社会科学は

一般的には世界を真に理解することに失敗し、かつ誤導する面も大であった。人類の直面する問題にさしたる正解も与えられなかった。生態系破壊、環境問題、異常気象、食料不安、資源問題等あげれば際限がないほどの歪みや成長の天井が眼前に迫っている。モダニズム社会思想の双生児ともいふべき資本主義も共産主義もこの事態を引起こした責任があるといえるであろう。今流行のリージョナリズムやグローバリズム、「世界新秩序」や規制緩和、市場経済の導入でも、この問題群が解決されるわけではなく、むしろ悪化する可能性が大である。近代の社会科学は概していえば、社会や世界や人間の医者としては、間違えた診断をし、投薬を間違えた医者のようなものではなからうか。

18世紀から19、20世紀の社会科学がこのような意味で壮大な「失敗」であったことを直視することから、はじめて21世紀の人類や日本に明るい展望が開けるのではないであろうか。職業としての社会学者の位置に安住するのを目指すだけでなく、この自己内省察を私たち社会学者は回避してはならぬように思う。

## 〔II〕 ニュートン型の学であるモダニズム（アメリカニズム）の社会科学

近代社会科学の歪みと弊害を、私はそれが自己疎外された知の体系や情報の束であることにもとめた。その原因はいろいろなところに求められよう。

- 一、「全体知」を求めるなかではじめて可能な作業を、それらは格子形に機械的に細分化された矮小な枠の中で、いわば「部分知」の精査を実行する方向に強く傾斜してきた。その結果得られる認識は実態とはかけ離れた誤解や錯覚を生むものになる場合が多くなつた。

二、それらの大部分が近代西欧に根を持つ機械論的な世界観や機械論的な人間観を事実上とり、認識の方法において

デカルト・ベーコン、ヒュームらの感覚（五感あるいはその延長ないし補強による）に依存する、外部を見る認識だけに強く傾斜した。別の角度からいえば心や精神による古来から彫琢された認識方法を何故か否定した。ベーコンらの外を見つめる認識方法だけに信を置き、プラトンらが説く、内から見、かつ知る認識方法を何故か軽視ないし否定した。

三、その結果、世界観ないし存在論において、実際上はかなり単純な唯物論をとったといつてよいような状態が社会科学の世界で現出した。この根は近くは19世紀のフォイエルバッハのヘーゲル批判に求められるが、率直にいつて、それはかなり根が浅いものに過ぎなかつたといえよう。重金主義や古典派経済学以来、経済学は物質主義や利己主義や唯物主義に強く傾く傾向が見られた。20世紀になると、加速度的に金権主義や物質主義が世界的に瀰漫し、それと連動してさまざまな潮流の経済学の中で実質的には唯物主義が支配的になったといえるだろう。経済学を中心に社会学・政治学・国際政治学・国際政治経済学等、様々な領域に機械論的な世界観や人間観が浸透していった。社会科学はもっぱら「形而下的な社会科学」となった。

四、16から18世紀などのあるいは19世紀の近代社会科学の創成期にはあつた唯心論ないし形而上学が、20世紀になると覇権国家アメリカのなかで、あるいはアメリカを中心に放射状に、モダニズムひいてはアメリカニズムとかたちで実質的に否定され、要素還元主義的・機械的・人間機械論的ないわば形而下オンリー的な狭い理解・思考方法が世界的に広げられた。

五、物質的ではない存在論ないしは世界観が、20世紀には何故か磨耗するにいたつた感がある。宇宙や世界や人について古来から感じられ、信じられ、論じられてきた、非物質主義的な世界観、大宇宙観、人間観が事実上乱暴に

削ぎ落とされ放棄された感がある。マルクシズムにあっては、これは無論周知のことである。神無き時代ということが言われるが、20世紀の諸社会科学の多くはそのような単純なあるいは乱暴な哲学なく、形而上学なき、乱暴な情報の倉庫に転化された感がある。真の存在論を欠く社会科学の氾濫となったわけである。

いささか象徴的に表現するならそれらは、近・現代に奇異に拡大した利己主義（エゴイズム）と物質主義と力への信仰のイデオロギーとなったともいえる。

これらの20世紀の社会科学は人類史通底的に存在し、実は重大な意義をもつ形而上的な存在論（オントロジー）、アリストテレスの「宇宙のロゴス」、ヘーゲルの「絶対精神」の基盤を奇妙に欠落している。その限りで人間や社会や、国家や世界を扱うもののようにでありながら、肝心の人—地球—宇宙の形而下—形而上—一体の、ネットワークあるいは相互浸透的な存在様式についての認識を欠落し、極端に歪み、誤った巨大な情報の発信源になっているおそれが大である。外の凝視による認識法に何故か固執し過ぎたために、肝心の宇宙の本質や人間や世界の本質が分からなくなつたかの感があり、近年さすがに、その反省の声も世界の諸方、諸処で聞かれるようになってはいる。

端的に述べると、社会学でのM・ウェーバーの方法論的個人主義では、行為の主体たる個人は他から絶対的に独立し分離した存在であると考えられている。だが、他者や社会や地球や宇宙から離れた存在としての個人は元々存在しえない。また、フロイト、ユングやマズロらが明らかにした「深層心理」等を顧慮すると、完全に自立し、常に明確に意識的な人間など、いささか強く言うところ、どこにもいないのである。

マルクスが言ったように人間は類的存在である。マズロが言うように深層において、「超個帯域的」な意識を持つ。それだけでなく、森羅万象が類的一体性の内にあるとさえいえる。

まさに、「山川草木悉皆仏性」（釈迦）という関係にあり、別々に自立し独立した存在はありえないのである。進んでいえば、森羅万象が互いに浸透しあつて存在している。人間についていうと、個々人の中に森羅万象が、あるいは宇宙や世界が浸透し反映されてあるのである。宇宙―地球―社会―個人が有機的な一体となつて存在し、それがたんに物質レベルでそうであるだけでなく、心的ないしは精神的なレベルで感応しあい相互浸透的である。このことを忘れたか自覚しない社会科学、モダニズムのあるいは近代の社会科学は、自らの内的真実あるいは実態を忘失し知らない、ある意味で空洞化し・「自己疎外された社会科学」、社会思想であるといつてよからう。

それは西欧思想にある一面的な人間中心主義が肥大膨張した結果生み出された、自然とも、生き物とも地球とも、人間自身の本性とも機械的に恣意的に切り離されて作り出された、社会・人間についての虚像である可能性を否定できない。「宇宙のロゴス」に発するルールを極めるのが課題の、自然科学や社会科学にあつてその目標の忘失ないしは、目標からの逸脱がこの二世紀、とりわけ二度の世界大戦を含む20世紀に起こつた。ところが、元来、デカルト、ニュートン、アインシュタイン、スミス、J・S・ミル誰一人として、宇宙の絶対存在を否定した人物はいない。これなくしては宇宙・自然・生物・人間に係わる法則や調和の存在を説明することはできないのである。

東洋においても西洋においても人間や社会・国家に係わる学は、古来から「宇宙のロゴス」に発する「天地人倫」の道の探求と、それらの現状の探求に向けられてきた。つまり、ザインの研究とゾレンの発見や検出に向けられてきた。近世において社会科学ないし社会・人間に係わる学が自然法を意識して行なわれたことも、これに通じるものを持つている。「宇宙のロゴス」―東洋思想での「天地人倫の道」を巧みに切り捨てた形になっている、現代支配的になっているアメリカニズムやモダニズムの学問ないしは思想の逸脱・誤謬を、世界の知識人は、21世紀の人類の存亡が

かかっている時期を前にして、今きちんと吟味し、勇気をもって軌道修正の努力をしないとならぬのではなからうか。東洋文明と西洋文明との融合や、物質文明と精神文明の接合がそれにより可能になるのではなからうか。この問題提起を黙殺してよいのだろうか。

現代の社会科学は情報量の膨大性に関らず、内実が空洞化した自己疎外の社会科学ないし社会思想である。明治以来の日本の進展もモダニズム的な発展であると同時に、自己疎外の時代であつたともいえよう。日本は発展のうちに解体と溶解・滅亡・消失の危機に直面しているといえようか。

### モダニズムの社会科学は百年遅れてしまった

現代の社会科学は奇形化してしまつた。自然・人間機械論・唯物主義・要素還元主義、主客二分法、量に対する信仰等。この方向への徹底化を進歩と信じたのであり、その結果は学問の砂漠化と人心と社会と地球の砂漠化であつた。アメリカニズムとでもいふべく、倒錯的に、「天地人倫の理」やモラルが見事に切り捨てられた。

元来、近代の社会科学は経済学を尖兵として、人間・社会の学をニュートンの古典力学を模範に作り替えようとした。その成果が一応上がったと思われるのが、18世紀から19世紀であり、20世紀はそれがさらに練り上げられた。ところが、同じ20世紀には量子論・相対性理論・宇宙科学・分子生物学・生命科学・人類学・分子生物学の急速な展開が見られた。哲学にあつても各種の努力が見られた。その結果は古典力学の徹底的な相対化であり、急激な旧時代化であつた。しかし、一人社会科学のみが古典力学の手法を絶対視して、あたかもそれが近代的で新しいものであるかのごとき錯覚に陥っている。このあたりに事態の深刻性と人類にとっての悲劇性といえるものがある。社会はとつく

に過去のものとなりつつある「ニュートン型社会科学」を信奉して、国家政策や外交面や国際社会の運営上でもその影響を受けて運営されているからである。

社会科学は百年以上遅れてしまったというのは、その意味である。20世紀にその立ち後れを是正する努力はいろいろな形で為されたといえなくもない。とはいえ、依然としてアインシュタイン以前の18・19世紀流のニュートン型社会科学を離脱できない。分離・分断的・要素還元主義的・主客二分法的・物質主義的三次元空間や時間の単純な因果律に鎖国している状態から脱出できないでいる。「宇宙のロゴス」、「天地人倫」の道を重視する、いわばホリスティックな社会科学への転換が出来ないでいる。宇宙—地球—生物—人間全てのもは内的に相互浸透的であり、部分の中には全体が宿っている。個々人のなかにも、社会や国家にも宇宙の全体が宿っているといえるかもしれない。

### 〔Ⅲ〕 ホリスティックな社会科学への脱皮

21世紀に向けて社会科学はホリスティックな社会科学とでもいうべきものに、脱皮再生を図る必要があるだろう。既に述べたように宇宙全体さらには非物質的な大宇宙との多次元的に相互浸透的な存在構成を意識しての社会科学全体への転換、さらにはその諸分野の抜本的な再構成を図る必要がある。経済学でも、社会学でも、政治学でも、はたまた法学でも、歴史学や人類学でも、ホリスティックな相互浸透性を意識し重視する内容構成が必要になろう。

私は宇宙には調和の原理があると考える。さしあたり物質宇宙については、マクロのニュートン均衡にたいして、ミクロには素粒子レベルでも一種の凝集力が働いており、これが非物質から物質への凝集をもたらししている。エネルギーの物化が起きると考えられる。さらに宇宙、自然・人間・諸生物の間に「友愛引力」とでもいうべき心理的な

しは精神的な引力が働いていると考える。

全体を見ると、この宇宙（小宇宙）は本来が友愛宇宙であり、太陽系は一種の友愛宇宙であり、地球とその諸生物もすべてが類的なものであり、普遍性を通有して友愛地球としてある。なぜこのような形になっているかといえは、究極的の源泉たる「宇宙のロゴス」の然らしめるところとでも言えるであろうか。人間が如何に生きるべきか、社会が如何にあるべきか、経済・政治・法・国家・世界が如何にあるべきかのゾレンは、これらの宇宙の調和の秩序に対応して自ら定まる。すなわち友愛・互酬・調和の秩序であろう。この秩序の中には当然ながら、精神的な要素ないしは次元が入っている。

現代に支配的な個人主義・利己主義・物質主義・効率や計量万能、闘争や競争原理は、この宇宙の秩序からの無軌道で法外な逸脱といわるべきかもしれない。この中において、個人も社会も経済も政治も自己疎外されており、一面発展をとめないつつも、破壊と闘争や貪欲や犯罪が世界を支配する。

その中軸を貫くのは、近世以降の世界資本主義の展開と膨張による「欲望経済」と「欲望政治」の展開であり、そのグローバルゼイションと国家の大規模化・超国家形成による、世界金融資本（結合せる諸国金融資本）を主体にするグローバルな政経世界中央集権制の成流れであるのであろうか。